

海部の地理(一五)

— 産業よりみた米水津村の特色 —

矢野 彌生

(会員・佐伯市中山区)

米水津村の産業について、第一次産業・第二次産業・第三次産業の三領域について考察を試みたものである。特に、米水津村の唯一の工業ともいべき製造業で、全国的に評価が高いいわし丸干しの水産加工については、その歴史的経過やいわし丸干し産地形成の諸要因など紙数の許す限り取り上げてみたい。

第一次産業 米水津村における平成二年(一九九〇)

の産業別就業人口率は、第一次産業は三二・〇割で、もっとも低く、第二次産業三七・二割、第三次産業三一・七割となっており、第一次産業人口率は全国平均(七・三割)に比べて高い。

〈消えた水田、ほとんどはミカン園〉 第一次産業の就

業者総数(平成二年)は四一三人で、そのうち漁業水産養殖業者は二九六人で最も多く、農業一一六人、林業・狩猟業一人となっている。

米水津村の農家と耕地の状況をみると、第1表のとおりである。すなわち、第1表で明らかのように昭和三十五年から平成二年まで第二種兼業農家が圧倒的に高い比率を占めていることである。これは農業を片手間にする農家が多くを占めていることを物語っている。また、米水津村の農業の特徴としては、耕地面積のうち、水田が皆無で、すべて畑で占められていることである。米水津村の水田は我が国の経済の高度成長期の昭和四十三年(一九六八)に消えてしまった。そのため、全国的にも珍らしい米粒一つとれぬ村となった。この状況を新聞報道では、

日本民族は古来、米とともに生きてきた。小学校の社会科や理科の教科書にも稲作の歴史や米の生育など扱われている。だが、水田が消えていく都市部では、米がどうしてできるのか知らない児童が増加している。このため、田植えや稲刈りなどの体験学習をさせる学校もあるほどだ。「直接見せて肌で感じ

第1表 農家と耕地

(単位：戸、ha)

	農家 総数	専業	兼業		耕地面積		
			第1種 (農業主)	第2種 (農従)	総数	水田	畑
昭和35年	638 (100)	61 (9.6)	120 (18.8)	457 (71.6)	202	2	200
40	565 (100)	34 (6.0)	75 (13.3)	456 (80.7)	199	1	198
45	502 (100)	30 (5.9)	41 (8.2)	431 (85.9)	159	—	159
50	464 (100)	42 (9.1)	40 (8.6)	382 (82.3)	155	—	155
55	416 (100)	60 (14.4)	24 (5.8)	332 (79.8)	146	—	146
60	330 (100)	64 (19.4)	12 (3.6)	254 (77.0)	84	—	84
平成2年	243 (100)	46 (18.9)	15 (6.2)	182 (74.9)	100	—	100

注：()内の数字は100分比。(農業センサスによる)

させないと教科書やテレビでいくら教えてもダメですね。うちでも社会見学や遠足の際に、佐伯市木立地区の水田を見せたり、話を聞くなどしているんです。同村、向陽小学校教頭、山本一郎(五八)は、

水田のない村の現状をこう説明。村産業課長、山田甚弥(四八)も、「私らが子供のころは、田んぼの中に入って遊んだことがあるが、ないとなるとやはりさびしい。米の減反なんか全く関係ないわけで、米価値上げの時は複雑ですね。米水津村の農民は消費者で、米価は上がらぬ方がいいんですから」と、水田が消えた村の様子を伝えている(『大分合同新聞』昭和六十年二月三日版)。

更に、米水津村の農業では、農家数の減少や労働力の高齢化、女性化、耕地が最近では激減している(第1表参照)。これは、農家の耕作放棄や宅地造成などによるものである。また、自立農家も少なく、農業後継者も皆無に近い。

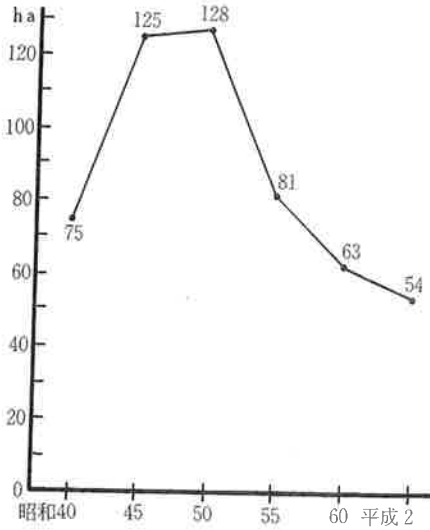
〈早生温州やサンクイーンに特色〉 米水津村では昭和四十八年に晚柑類のサンクイーン(セミノーブル)を導入、栽培に力を入れてきた。急傾斜地は多いが、無霜地帯に近い温暖な気候に恵まれて栽培面積は伸び、平成五年(一九九三)には一一畝で栽培されている。県産のサンクイーンは消費者に好評であり、四月から東京市場向けに出荷されている。

また、村内のミカン栽培の中心地でもある色利浦では、極早生品種の「宮本早生」をビニールハウスで加温栽培し、六月下旬には収穫し、早期に出荷している。

更に米水津村は、三股系普通温州の原産地であ



竹野浦のみかん園



第1図 ミカンの栽培面積の推移
 (『県南の市町村別農林統計書』により作成)

り、古くから品質のよいミカンの産地である。現在、このミカンは樹齢が七十〜一〇〇年と古いため、品質が安定しており、へん平型で皮が薄く、糖度は一一度から一二度といわれる。臼杵トキワでは、平成三年(一九九一)に産地直送ミカんに『みまたみかん』を売り出し、東京、大阪方面の人たちから大変喜ばれたという。

次に、米水津村のミカンの栽培面積の推移をみると、第1図のとおりである。すなわち、栽培面積も昭和五十年の一二八畝をピークに、五十五年八一畝、六十年六三畝、平成二年五四畝と減少していることがわかる。

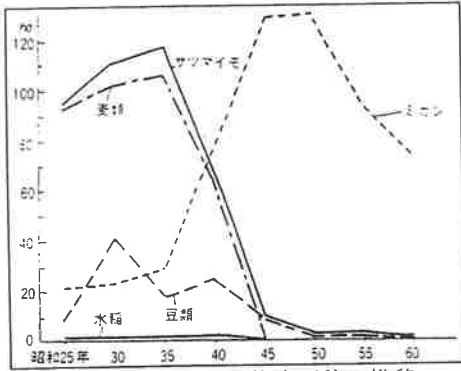
また、村の農業の中心である柑橘の生産額をみると、平成三年では、サンクイーンが三一五〇万円と最も多く、次いで極早生温州が二四八九万円、伊予柑一七六〇万円と続き、その他ハウス早生、ボンカン、早生温州といったところが主なものである。しかし、農家規模でみると一〇〇万円以下がほとんどで、三〇〇万円以上の生産額の農家はわずか四戸にすぎず零細経営である。⁽²⁾

(昔はサツマ芋と麦が二大作物) 第二次大戦後の米水津村の主な作物の変遷を、その耕地面積によって示すと、第2図のとおりである。これで明らかのように、昭和三

十五年（一九六〇）ごろまでは、農作物の中では裸麦とサツマ芋とがそれぞれ栽培面積が一〇〇畝をこえて二大作物であった。

昭和二十年代後半ごろから、米水津村をはじめ、県南の海岸地域の農漁村では、従来の生産性の低い段畑のサツマ芋と麦から、ミカン栽培へと作物の転換が目立って増加し、今日みるようにミカン園が村内のほとんどの畑地で栽培されるようになった⁹⁽³⁾。

また、最近では、家畜も飼育されていないことから、



第2図 農作物の栽培面積の推移
 (『村勢要覧』、『農業センサス』により作成)

これらミカン園への有機肥料の供給ができないため、昭和五十九年にミカン園の緑肥づくりを兼ねて切り花の「ルーピン」(学名ルピナス)を導入す

るなどの新しい試みもなされた。

〈ヒヨドリや猿による農作物の被害〉 米水津村の農業

の課題の一つに、野生動物による農作物被害防止対策がある。近年、ヒヨドリによる畑の野菜や、ミカン収穫期のサル・イノシシ・タヌキによる樹園地の被害がひどい。鶴見半島では、かつては猪垣ししがきの例が示すように、イノシシの被害が大きかった。

昭和六十一年に、色利浦西谷地区では、東京のメーカーが開発した「害鳥類駆除装置」を四基設置して実用実験を行なった。これま

で猟友会に頼んだりして対処していたが、ほとんど捕獲ができず、効果がなかったことから、その対策として行なったものである。この装置は、スピーカーから動物の嫌う高い金属音(超音波と可



小浦の山腹にある猪垣

聴音波)を五分間で三〇秒間不規模に発生させ、害鳥類の中樞神経を刺激して近寄せないようにするもので、一基で幅六〇m、前方七〇mの範囲に効果があるという。しかし、動物が慣れてしまうと効果が薄くなることから、昭和六十二年には新たにセンサー(感知器)をつけて試験を継続して行なうこととしており、その効果が期待されている。

〔零細経営の林業、多い公有林〕 米水津村の林野面積は二二三九畝(平成元年)で、村の面積の八七・九割を占めているが、地形が急峻で、表土が浅いため、植林性に乏しく、人口林率は四〇・二割と低い。村には専業の林家は皆無で、一戸当たりの保有面積も、一畝未満が一・二割と零細経営である。

また、保有形態別の森林面積では、私有林が七九九畝、全体の三五・七割と少なく、地区有林六九七畝、県行造林三三七畝、県有林二二三畝、村有林一三二畝、公社造林六二畝と公有林が多いが目立つ。米水津村の林業は産業としての林業は存在せず、しいたけなど特用林産物も、自家消費程度にとどまっている。しかし、村の林業は村土の保全や水源の涵養にとっては極めて重要な使命

を有している。

〔米水津村の漁業〕 米水津湾の漁業は、米水津湾と、豊後水道の海域をおもな漁場とした内海型漁業である。

(第3図参照)。平成五年(一九九三)の米水津村の漁業種類別経営体数をみると、総経営体数一一〇のうち、



第3図 米水津湾の定置網及び一本釣り、刺網、その他漁業の操業場所 (『米水津村誌』より引用)

釣り漁業一
九・小型底
びき網一
六・小型定
置網一〇・
海面養殖
七・まさ網
六・ぱつち
網四・その
他の漁業四
一となって
いる。
また、村
の業種別漁
獲量・就業

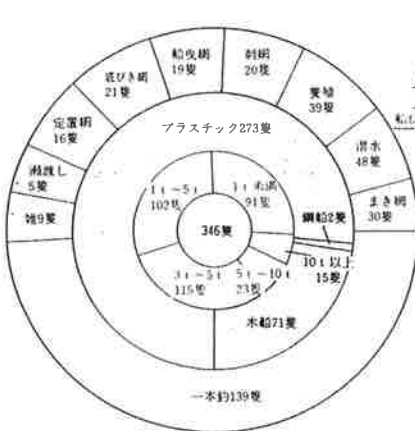


漁船漁業の中心基地 色宮漁港

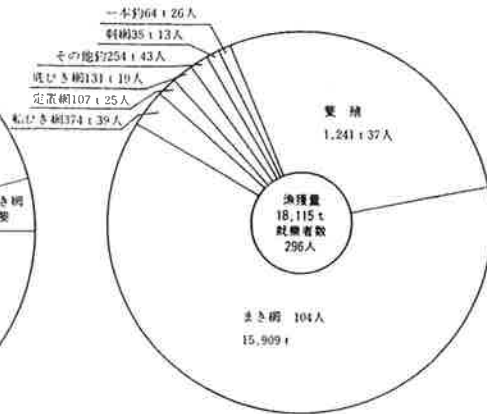
者数及び漁船数を示すと、第4図・第5図のとおりである。すなわち、漁獲量では中心漁業であるまき網漁業が一五五九〇九ト（全体の八七・八割）で圧倒的に多く、次いで養殖業が一二四一ト（六・九割）、船びき三七四ト（二・一割）、底びき網一三三ト（〇・七割）、定置網一〇七ト（〇・六割）となっている。隻数では一本釣り一三九隻で最も多く、次いで潜水四八隻、養殖業三九隻、まき網三〇隻などが多いことがわかる。

次に、業種別漁獲金額についてみると、第6図のとおりである。すなわち、まき網漁業が二億九七三万六〇〇〇円を占め、養殖漁業が一四億八二九七万二〇〇〇円（三三・七割）と多いのが目立

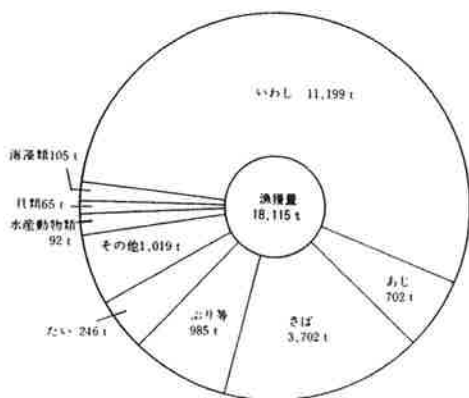
き網三〇隻などが多いことがわかる。



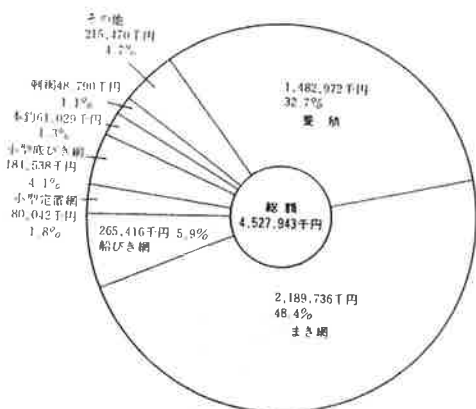
第5図 漁船の種類別隻数
(米水津漁協による。平成2年3月31日現在)



第4図 業種別漁獲量・就業者数
(漁獲量は農林水産統計<昭和62年>、就業者数は漁業センサスによる)



第7図 魚種別漁獲量
(農林水産統計による。〈昭和62年〉)



第6図 業種別漁獲金額
(農林統計による。〈昭和62年〉)



宮野浦のまき網漁業

一部アワビ・サザエなど潜水漁業も営まれていて、更に、漁獲された魚種のうち、イワシ・サバはハマチ養殖の餌として養殖漁業からの需要があり、また、イワシ・アジは、水産加工業の材料としての需要があ

つ。
更に、漁種別の漁獲量では、イワシが一万二一九九ト(六一・八割)と最も多く、サバ三七〇二ト(二〇・四割)、ブリ等九八五ト(五・四割)、アジ七〇二ト(三・九割)、タイ二四六ト(一・四割)などが多い(第7図参照)。
いま、統計資料でみてきたように、米水津村の漁船漁業は宮野浦を中心漁港として、まき網を中心に船びき、小型定置、小型底びき網、刺網などが営まれているほか

る。

米水津村の中心漁業であるまき網漁業の乗組員の賃金をみると、漁獲高から大仲経費（燃料代・食費など）を差し引き、船主五五割、乗組員四五割の配分で、いわゆる「大仲歩合制」を採用しており、船主の配分が多いのが目立つ。今後、近代的な固定給に歩合を加える形態の採用も課題であろう。¹⁴⁾

また、宮野浦地区では、まき網漁業を営んでいる船主については後継者は全く心配はないという。

〈県下最初のハマチ養殖〉 米水津村は県下の養殖漁業

の先進地である。昭和三十三年（一九六〇）四月、漁協直営で県下最初のはまち養殖が米水津湾で始められた。その後、漁場は蒲江湾・佐伯湾・津久見湾・臼杵湾など、豊後水道のリアス式海岸の各入江でも養殖されるようになった。



米水津湾のはまち養殖

県内のブリ生産量の

推移をみると、昭和四

十二年に五八四トで

あったが年々増加の一

途をたどり、平成二年

（一九九〇）には一万

二五八五トと、この二

五年間に約二〇倍にも

拡大した。また、経営体数では、近年変動が小さく、平

成二年では九九である。県下の魚類養殖はぶり養殖を主

体に発展してきたが、近年では、全国的な生産過剰で価

格が低迷しており、マダイ・シマアジ・トラフグ及びヒ

ラメなど対象魚種の拡大、新魚種の導入が進んでいる。

また、たい類養殖は病害に強いことから湾奥部の各

養殖場に普及した。

しかし、近年は減少傾向をしめし、平成二年には九五

九トが収穫されている。シマアジ・トラフグ及びヒラメ

養殖は近年盛んになってきている。¹⁵⁾

米水津漁協が県下初のはまち養殖にふみきつたのは

「とる漁業からつくる漁業」を進めるといふ理由からの



出荷される養殖ぶり

みではなかった。米水津村は県下でも屈指のまき網漁業の盛んなところである。イワシ・サバなどの漁獲があつても市場では安値で、漁民の生活は苦しい。そこで昭和三十五年ごろ、米水津漁協が、漁獲されたイワシ・サバを養殖魚のえさ用として購入し、漁民の生活を支えようと考へて始めたのが養殖であつた。すなわち、魚価対策がハマチ養殖開始の直接的理由であつた。

しかし、現在のように、全国的に養殖が普及すると、それまで高級魚であつたハマチやブリが一般家庭の食卓に上るようになった。一方、大衆魚として食用とされたイワシやサバは、ハマチなどの飼料として需要のほとんどを占めている。

現在、米水津湾ではハマチ・ブリ・タイなどの養殖が行われており、市場において㊦印として高い評価を得ている。しかし、全国的な生産過剰による価格の低迷もあり、新しい養殖魚種の開発なども課題となつている。また、養殖場が海流が滞留する湾内にあるため、魚の発育が悪く、沖合での養殖方法の検討も今後に残された課題である。

〈米水津湾の真珠養殖〉 昭和三十五年のハマチ養殖につづいて、四十年には米水津湾では真珠養殖も始められている。当時の状況を『村報』（七月十日付）では次のように伝えている。

本村においても漁協を中心に長い間検討されましたが、いよいよ着手されました。さしあたって、浦代、小竹地区で稚貝採苗のため、新しい移行式採苗法によるイカダを、浦代浦、竹野浦、小浦の湾内に各三六台ずつ設置しました。現在は水産試験場、佐伯農林事務所の協力によつて、水温、プランクトンの状況等を測定中ですが、近いうちに湾内の大部分が真珠イカダ一面に塗りつぶされることになれば、地場産業の振興のうえからも大へんよい。実施中のものはグループ制によるもので、四つのグループで、約六〇人の人がこれに加わっています。

昭和四十三年には真珠養殖一件・筏^{いかた}台数二八台、真珠貝養殖七件・筏台数一八六〇台に達している。しかし、昭和四十二年以降の不況期をむかへ、米水津湾内の真珠養殖も四十八年には操業が皆無となり、短い操業の歴史を終えた。

〈全国初の資源管理漁場造り実験が実施された米水津湾〉 豊後水道南部海域では早くから漁業資源の維持培養に努めながら、合理的な生産によって利益をあげる生産体系、すなわち資源管理漁業の実現を目標に、人工礁漁場の造成や人工種苗の放流など県や市町村によって進められている。

資源管理漁場の造成は、ひと口に言って、一定の海域で漁業資源を保護育成、管理しながら、計画的に安定した漁獲を行うことができる漁場づくりである。この夢のある新しい漁場づくりは、全国的にみても最初であり、大分県水産試験場によって、昭和四十八年から五十二年までの五年間、米水津湾を実験の場として、資源管理型モデル漁場造成実験が行われた。

米水津湾が実験場として選定されたのは、①台風や暴風雨の時も湾内はさほど荒れないこと、②人や車が近づけないところ（音や光は実験にマイナス）、③水産試験場から一時間の距離であること、などがあげられる。

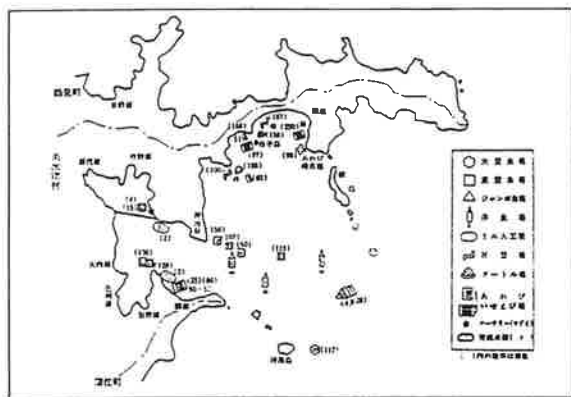
昭和五十二年度はこの実験が終了した時には、約一億四〇〇〇万が投じられたが、このモデル漁場づくりは、ごく岸辺の砂礫場や岩礁帯から深部にかけての未利用海

底の開発を、アワビやイセエビに焦点をあてて行い、漁類については、種苗生産が可能な高級魚ということまでまいをとりあげて、仕切網方式による中間育成（ナーサリー方式）を行って放流している。

また、米水津湾内には、昭和三十年代から続けられている並型魚礁の団地があるが、この魚礁団地に放流した

まだいが回遊して行くための誘導ための誘導魚礁の設置と、米水津湾の重要魚種であるイワシ・アジ類のための浮魚礁などが有機的に配置された

（第8図参照）。



第8図 米水津湾の資源管理実験漁場（『豊後水道域』による）

米水津湾で、音響馴致したマダイを放流して、再び漁場で馴致したまだいを音響で集めて漁獲しようとする実験は、今なお続けられている。この実験は、集まった魚群の質と量とをテレメーターシステムで漁協まで送り、漁協でブラウン管に映しだされた像を判読して、出漁、出荷計画を樹立し、不必要な時間・労力・飼料などの節約を図って、完全に資源管理型漁業を実現しようとするものである⁶⁾。

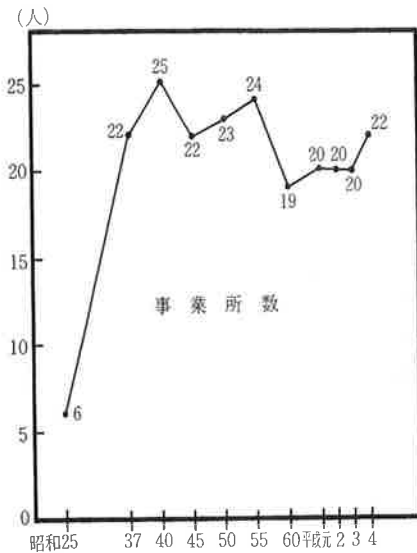
更に、昭和六十一年には県水産試験場が、米水津湾の色利浦沖でも、県下では最初という、海面小割いけす方式でのクルマエビの稚えびの中間育成を始めている。佐伯湾では数年前から大入島沖で中間育成したクルマエビを放流しており、かなりの水揚げがある。そのため、豊後水道南部海域をクルマエビの好漁場にするねらいで、今回、新しい方式で中間育成が始められたのである。

米水津湾における栽培漁業やその新しい実験は、県下の沿岸漁業を大きく飛躍させる原動力の一つになっており、県下の漁業先進地としての役割は大きい。

第二次産業

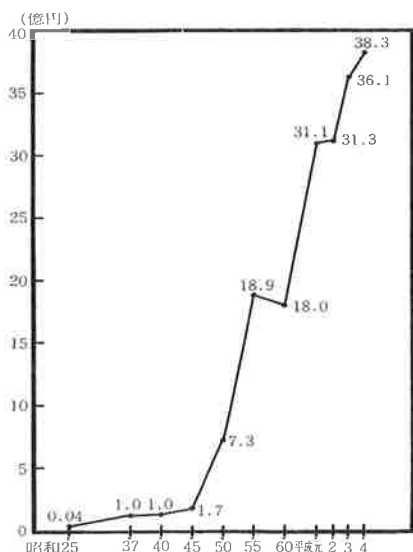
米水津村における平成二年（一九九〇）の第二次産業の就業者総数は四九六人で、うち鉱業四人、建設業一四六人、製造業三四六人（うち男子七八人）となっており、製造業の従事者が全体の七〇割を占めて多い。

いま、米水津村の事業所数、従業者数及び製造品出荷額の推移をみると、第9図・第10図・第11図のとおりである。すなわち、事務所数では昭和四十年の二五事業所数をピークに以後は二〇事業所前後を維持しており、大きい変化はない。また、従業者数は昭和四十五年以降

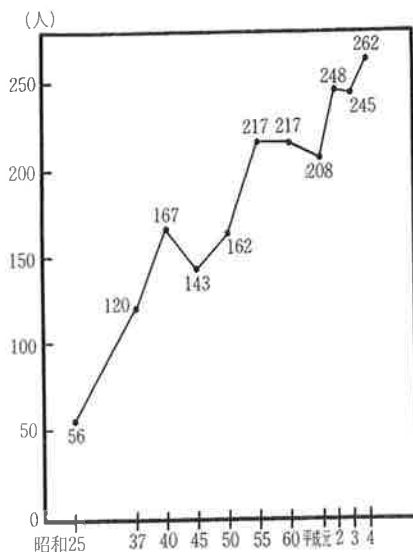


第9図 事業所数の推移

(「大分県の工業」・「米水津村の統計書」により作成)



第11図 製造品出荷額等の推移
 (『大分県の上業』・『米水津村の統計書』により作成)



第10図 従業者数の推移
 (『大分県の上業』・『米水津村の統計書』により作成)

漸増しており、製造品出荷額等では昭和五十年代に入ってから急増し、平成四年(一九九二)には三八億円に達していることがわかる。小さな漁村で短期間に高度成長をしていることがわかる。米水津村の場合、製造業はすべて水産加工である。この著しい水産加工の成長の諸要因を考えてみたい。

〈明治期に始まった宮野浦地区の水産加工〉 村の最南部に位置する宮野浦の水産加工が始まったのは明治十五年(一八八二)ごろといわれる。その頃からイワシ漁は盛んであったが、まだ佐伯への道路もなく、陸の孤島であったため鮮魚として商品化することは困難であり、加工による販売が中心にならざるを得なかった。その形態としては、いり



昭和30年代の宮野浦の干魚
 (『米水津村誌』より引用)

こ・削り節・塩干・肥料等であり、そのような形態は昭和五十年代までほとんど変わらないままであった。

しかし、このような状態も、道路の整備と若い後継者のUターンによって短期間のうちに大きく変化していくのである。¹⁷⁾

いわし丸干

全国的に評価の高い米水津村のいわし

し産地形成

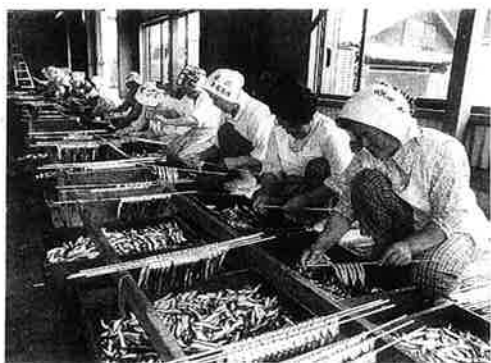
丸干しの産地形成に大きな役割をになつ

たUターンの青年達の状況や米水津村がおかれた昭和四十年代～五十年代の地理的・社会的な背景、産地形成までの企業努力の足跡の一端を述べてみたい。

〈Uターンしてきた青年達〉

停滞していた村に、昭和

四十五、六年ごろ、後継者達が次々に帰ってきた。もちろん積極的に帰村した人は多くはなかったといわれ、親の説得にしぶしぶ帰村した人が多かったようである。初期に帰村した青年達が様々な、積極的な水産加工の仕事を開始し成功を収めると、それに続いて、次々とUターンが行われ、村内水産加工業のほとんどが後継者を抱えるようになるまでは多くの時間は必要としなかったという。



宮野浦の水産加工

このような若年層が後継者として帰村するという事態は村を活性化した。村の水産加工が成功した理由は一般的にいわれてゐるのは、これら若年後継者のエネルギーを力に変えていった

指導者の存在が大きかったといわれる。更に、米水津村をとりまく地理的・社会的なプラス要因が強く働いたと考えられる。すなわち、そのプラス要因には、①地理的に辺境の漁村であり、そのため長期間にわたって経済発展から取り残され、そこからの脱却願望が強くあったこと、②地理的に孤立した漁村であったが、共同体意識が強く、村おこしに対する協調態勢があったこと、③昭和四十年代後半から五十年代初期にかけて我が国の経済が

低成長期に入り、都市からのUターンの条件が生じたこと、④豊富な労働力があつたこと、⑤村内に水産加工以外の製造業の立地が困難であつた、などがあげられよう。

〔周年操業の実現と生産工程の改善〕 まず、原料であるイワシ調達の季節性の克服をはかる。米水津が位置する東九州にイワシの回遊があるのは四、五月から八月までで（原料の約二〇％）ある。したがつて、それまではその期間に漁獲される原料魚だけでイワシ加工は行われていた。しかし、村の水産加工業者は年間安定操業を目標として、イワシを求めて九州管内をトラックで走り回る姿は、九州のイワシ水揚げ地で、「米水津のトラック部隊」として有名になつたという。

このような積極的な原魚調達は昭和五十一年ごろから始められたといわれるが、その過程で米水津村の加工業者は水揚地、保管方法などの情報を着々と入手、現在の周年操業体制を確立したのである。

更に生産工程の改善にいち早く着手した。ここでは、冷風乾燥機をメーカーと共同開発、あるいは独自の冷凍技術を開発した。これらは加工過程での薬物使用を不要にし、当時からますます社会的要請となりつつあつた消費者

の「無添加」志

向に込めると

もに天候に左右

されざるをえな

かつた天日乾燥

の欠点を改善し

ている。¹⁸⁾

いま、県南地

域の水産加工品

の種類別生産量

をみると、第2

表のとおりであ

る。すなわち、

昭和五十五年で

は、米水津村の

生産量が最も多

く、六二七〇ト

ンで、全体の六二

七を占めてお

り、次いで蒲江

第2表 県南地域の市町村・種類別加工生産量

(単位：トン)

市町村名	年	素干し	塩干品	煮干し	節類	穀製品	魚油	飼肥料	冷凍品	その他	計
佐伯市	51	30	260	438	80	247		12	3	18	1,088
	55	5	108	289		224			214	8	848
鶴見町	51		18	205				10		13	246
	55	1	57	250		7		1		12	328
米水津村	51		970	130	935		202	43		160	2,440
	55	5	2,721	229					3,312	3	6,270
蒲江町	51	6	861	329	57		1	300		83	1,637
	55	82	315	91	27	27		1,124		968	2,634
計	51	36	2,109	1,102	1,072	247	203	365	3	274	5,411
	55	93	3,201	859	27	258		1,125	3,526	991	10,080

(「農林統計」(昭和55年)による)

町・佐伯市・鶴見町の順となつてゐる。加工生産量を昭和五十一年と対比してみると、佐伯市を除いた三町村は増加しているが、特に米水津村の増加が著しく、一・五倍もふえていることがわかる。製品別にみると、米水津村では、冷凍品（五三割）と塩干品（四二割）が多く、この二加工品で、全体の九六割を占めている。

〈新市場の開拓と流通機構の改善〉 米水津村の宮野浦地区の水産加工業者は新しい市場開拓に積極的に取り組んできた。この状況を、平成二年（一九九〇）に発刊された『米水津村誌』⁽⁹⁾では次のように述べられている。

（前略）それは早い流通にのせる努力と、消費の動向を的確にとらえた加工方法である。従来の包装形態はほとんど消費地問屋向きの重量包装であつたが、それを消費者に直結した包装形態に変えて提供したこと、またそのことよつて得ることのできる消費者の欲する商品の開発及び情報、これは大きく米水津のいわし丸干しの大量消費につながつていった。最初二〇〇ポの小箱から始まつた包装形態はその後、一〇〇ポ単価のバック包装へと変遷していく。物流の面でも産地問屋を経由しない、大消費地への

直接輸送が可能になり、現在では関東・東海・関西・中国・九州北回り・南回りの六方面への冷凍車による定期運搬ができるまでに成長した。安定した原料供給、的確な消費者ニーズへの対応、流通革命へのたゆまぬ努力、これらの条件が満たされて、はじめて一流産地を形成することができる。わずか一〇年余りの期間にこのような産地形成を遂げた他の例はあまりない。これには宮野浦という土地柄に育まれた商人気質が底流にあると思われる。本村の中で最も商人の多い宮野浦地区にあつて、伝統的にその気質が受け継がれ現在一八社の水産加工業者に後継者の心配はない（以下略）。

宮野浦の加工業者は、県民生協の産地交流会にも出席し、消費者の生の声を聞くなど市場開拓の努力が続けられている。安全基準にもきびしい生協のPB（プライベート・ブランド）商品を九州のほとんどの生協関係でもらつてゐる。

〈ユニークな時間雇用制〉 県南地域の市町村における水産加工業経営体の労働事情をみると、佐伯市・鶴見町・蒲江町の加工業者は、一日八時間労働制をとり、日

第3表 宮野浦加工業者名及び雇人地区別人数

(単位：人)

加工業者	雇人地域	村	佐伯	灘	大人島	堅田	木立	尾浦	畑ノ浦	弥生	計
山田	稔	7	3	4			4				18
山田	銀二郎	10	3								13
山田	正美	10	6				5			7	28
小松	新文	10					10	12	5		37
大溝	博文	6	9								15
小畑	二郎	8	8		13						29
山田	仁司	8				6					14
宮脇	清弘	9	3				1				13
高橋	甚一	20	17								37
宮脇	重之	9	10								19
中宮	秀夫	10									10
渡辺	武夫	15									15
高橋	松二	3	4								7
小川	正男	20									20
小三	甚謹	18									18
小畑	吾長	9									9
小大	長繁	3	4				1				8
岡部		14									14
計		189	67	4	13	6	21	12	5	7	324

(四十田盛雄調査作成(山田水産除く))
 (『米水津村誌』(平成2年)より引用)

給として二九〇〇〜三〇〇〇円の賃金を支給している。
 一方、米水津村では、ユニークな時間雇用制を採用し、一日のうちでも工場の稼動状況に応じて自由に他の加工場に移動できる仕組みとしており、賃金は時間給三四〇〜三六〇円を支給している。

宮野浦水産加工組合(二九事業所)では、フレックス

タイム(自由な時刻に出入社できる労働時間管理制度)を採用しており、高齢者の体力・生活時間に合わせた、多数の雇用機会を創出して、地域の老年層にも働く場を提供し、地域の活性化を促している。

いま、宮野浦加工業者と雇人地区別人数を示すと、第3表のとおりである。第3表で明らかのように、労働力は村内及び佐伯市が中心であることがわかる。また、労働力は女性のパートが主体である。

米水津村の水産加工業は個人経営が主体で作業環境の改善や汚水処理などに課題が残されており、佐伯市への企業進出に伴う婦人労働力の流出の影響も懸念される。

また、平成三年に色利浦に完成した水産加工団地には平成七年四月現在、小川・小畑・ミヤワ



色利浦の水産加工団地

キ・ヤマジンの四社の加工業者と天野水産（養殖）が同居して操業をしている。いずれの加工場も大型の冷凍庫や冷蔵庫などを備え、これまでの工場より規模を拡大。作業場も加工と箱詰めを別々にするなど、清潔で作業しやすい環境を整えている。

第三次産業

米水津村における平成二年の第三次産業の就業者数は四三三人（うち男子二二八人）で、卸売、小売業が一三八人で最も多く、サービス業一六八人、公務五七人、運輸通信業四九人、金融保険不動産業一人となっている。第三次産業の人口率は、三二・七割で、全国平均五九・〇割に比べて著しく低い。

（多い佐伯市への購買力流出） 米水津村の卸・小売業の状況を概観すると、第4表とおりである。すなわち、大分県の全体の卸・小売業の年間販売額に占める米水津村の割合は、昭和四十五年の〇・〇三割から平成三年の〇・二七割と増加していることがわかる。

また、商店の集中度をみると、一店当たり年間販売額では昭和四十五年に一〇五四万円あったものが、平成三年に二二七万円と二・二倍増加しているが、県平均の

第4表 卸・小売業の動向

（単位：店、人、万円）

区 分	昭 和 4 5 年			平 成 3 年		
	大 分 県	南海部郡	米水津村	大 分 県	南海部郡	米水津村
商 店 数	20,375	815 (4.00)	13 (0.06)	23,060	691 (2.99)	48 (0.21)
従 業 者 数	76,732	1,444 (1.88)	23 (0.03)	108,995	1,808 (1.65)	105 (0.10)
年間販売額	39,601,516	309,475 (0.78)	13,704 (0.03)	298,075,685	2,540,567 (0.85)	109,319 (0.37)
1店あたり 年間販売額	1943.6	379.7 (19.53)	1054.2 (54.24)	12926.1	3676.7 (28.44)	2277.5 (17.62)

（『大分県の商業』により作成。（ ）内の数字は大分県を100とした百分比）

一・七割にしかなか達していない。米水津村の商業の最大の問題点として指摘されることは、村外への購買力の流出があげられる。大分県消費者買物調査（平成三年七月）によると、最寄品（生鮮食品・加工食品・日用家庭品など）の四六・三割、買回品（日用衣料品・靴・カバン等）の七二・二割は隣接の佐伯

市の商店から購入しており、専門店（電化製品・家具・スポーツ・レジャー用品など）では八三・二割が佐伯市で購入されている。また、南海部郡の他の町村においても、佐伯市での買物傾向が強く、特に専門品については宇目町七九・〇割、上浦町八七・二割、弥生町八八・三割、直川村八九・五割、鶴見町九一・三割、蒲江町八三・二割が佐伯市で購入されており、佐伯市への一極集中が進んでいる。

今後は、地元消費拡大のため、村の商工会を中心に魅力ある商店づくりが望まれる。



浦代浦の商店街

注(1) 大正六、七年ごろ、竹野浦の三股又四郎方へミカンの苗木が導入された。昭和になって、三股又四郎が宮中にミカンを献上。そのようなこと

から、「三股系」という普通温州が有名になり、今日まで普通温州として県南の銘柄品種として名声を維持してきた品種。『米水津村誌』による

(2) 『米水津村基本構想・基本計画』（米水津村平成四年）

(3) 矢野彌生「米水津村の人文環境」（『米水津村誌』

米水津村 平成二年）

(3)に同じ。

(5) 『大分の水産』（大分県 平成四年）

(6) 木谷益邦「豊後水道域における栽培漁業」（『豊後水道域』

大分大学教育学部 昭和五十五年）

(7) 『九州地場産業の現状と課題』上巻（九州電力

K・K 昭和六十三年）

(7)に同じ。

(9) 高橋治人「宮野浦加工業の推移」（『米水津村誌』

米水津村 平成二年）

(10) 『マリノポリス基本計画』（大分県 昭和五十八年）

(2)に同じ。

(11) 『大分県消費者買物行動調査』（大分県 平成

四年）

(12) 『大分県消費者買物行動調査』（大分県 平成